

神戸市北区

宅原遺跡群

— 三田西宮連絡管 送水管布設工事（長尾工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



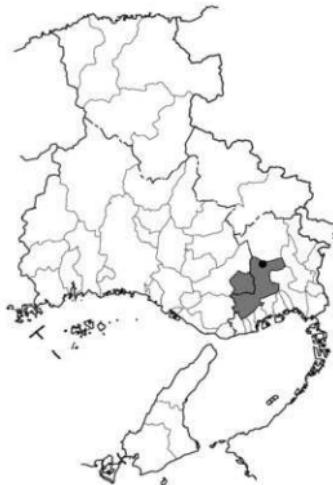
令和 5 (2023) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

神戸市北区

宅原遺跡群

— 三田西宮連絡管 送水管布設工事（長尾工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和5（2023）年3月

兵庫県教育委員会

例　言

- 1 本書は、神戸市北区長尾町に所在する宅原遺跡群の発掘調査報告書である。
 - 2 この調査は、三田西宮連絡管　送水管布設工事(長尾工区)に伴うものである。兵庫県企業庁猪名川広域水道事務所長の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、令和元年度及び2年度に兵庫県立考古博物館が調査を実施し、令和4年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が出土品整理作業を実施した。
 - 3 調査の推移
(発掘作業)
確認調査　令和2年3月18日～5月29日
実施機関：兵庫県立考古博物館
工事立会　令和2年9月1日～9月18日
実施機関：兵庫県立考古博物館
(出土品整理作業)
令和4年4月1日～令和5年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
 - 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 柏原美音の補助のもと、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部企画調整課 渡瀬健太が担当した。
 - 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
 - 6 調査及び測量にあたっては、本体工事受注事業者である株式会社ノバック・株木建設工業株式会社特別企業体の協力を受け、実施した。
 - 7 遺物の写真撮影は、国際文化財株式会社に委託し、実施した。
 - 8 座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
 - 9 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
 - 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関のご協力、ご指導をいただいた。記して謝意を表します。
- 神戸市文化スポーツ局文化財課

凡　例

- 1 本書に使用した地図は下記の通りである。
位 置 図：国土地理院　電子地形図25000を加工
調査範囲図：兵庫県企業庁　事業平面図を加工
- 2 遺構の略号は、土坑が「SK」、柱穴を「SP」、流路を「SR」、性格不明遺構を「SX」とする。
- 3 土器の種別の違いは実測図断面の色を、土師器は白抜き、須恵器は黒ベタ、陶磁器は網掛けで表示する。

目 次

第1章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 各調査の概要	2
第3節 出土品整理作業の概要	3
第3章 宅原遺跡群の調査	
第1節 調査の概要と基本層序	4
第2節 各調査区の概要	4
第3節 遺構	7
第4節 遺物	8
第4章 まとめ	
第1節 遺構	10
第2節 遺物	10
第3節 結語	11

図 版 目 次

図版 1	位置図、調査範囲図	図版 9	7 区平面・断面図
図版 2	宅原遺跡群調査対象範囲図	図版10	8 区平面・断面図
図版 3	1 区平面・断面図・遺構断面図	図版11	9 区平面・断面図
図版 4	2 区平面・断面図・遺構断面図	図版12	10 区平面・断面図
図版 5	3 区平面・断面図・土器出土状況図	図版13	11 区平面・断面図
図版 6	4 区平面・断面図・遺構断面図	図版14	SX01全体平面図
図版 7	5 区平面・断面図	図版15	出土遺物実測図
図版 8	6 区平面・断面図		

写 真 図 版 目 次

写真図版 1	1 区土層堆積状況（南東から）
事業用地近景（南西から）	1 区 SP01 実掘状況（北西から）
1 区全景（南西から）	1 区 SP02 検出状況（北西から）

- 1区 SP02 完掘状況（北西から）
 1区 SP03・SP04 検出状況（北東から）
 1区 SP03 完掘状況（北東から）
 写真図版 2
- 1区 SP04 半裁状況（南東から）
 1区 SP04 完掘状況（南東から）
 2区全景（南西から）
 2区土層堆積状況（北西から）
 2区 SP05 完掘状況（北東から）
 2区 SP06 半裁状況（南東から）
 2区 SP06 完掘状況（南東から）
 2区 SP07 完掘状況（北東から）
 写真図版 3
- 2区 SP08 半裁状況（北東から）
 2区 SP08 完掘状況（北東から）
 2区 SP09 完掘状況（北東から）
 3区全景（北東から）
 3区土層堆積状況（南東から）
 3区土師器甕（2）検出状況（南東から）
 3区遺物検出状況（南から）
 4区全景（南西から）
 写真図版 4
- 4区土層堆積状況（北西から）
 4区 SP10・SP11 検出状況（北西から）
 4区 SP10 半裁状況（南西から）
 4区 SP11 半裁状況（南西から）
 4区 SP10・SP11 完掘状況（南西から）
 4区 SP12 半裁状況（北東から）
 4区 SP12 完掘状況（南西から）
 5区全景（北東から）
 写真図版 5
- 5区土層堆積状況（南東から）
 6区全景（南西から）
 6区土層堆積状況（北西から）
 6区 SX01 検出状況（南西から）
 7区第1遭構検出面全景（北東から）
 7区第1遭構検出面 SR02 検出状況
 （北西から）
 写真図版 6
- 7区第2遭構検出面全景（北東から）
 7区第2遭構検出面 SX01 検出状況（北西から）
 写真図版 7
- 7区土層堆積状況（北西から）
 8区第1遭構検出面全景（南西から）
 8区第1遭構検出面 SR02 検出状況（南西から）
 8区第2遭構検出面全景（北東から）
 8区第2遭構検出面 SX01 検出状況（北西から）
 8区土層堆積状況（南東から）
 9区第1遭構検出面全景（南西から）
 9区第2遭構検出面全景（南西から）
 写真図版 8
- 9区土層堆積状況（北西から）
 10区第1遭構検出面全景（南西から）
 10区第1遭構検出面 SK01・杭跡検出状況
 （南東から）
 10区 SK01 埋土土層断面（南東から）
 10区杭跡（南東から）
 10区第2遭構検出面全景（南西から）
 10区土層堆積状況（南東から）
 11区第1遭構検出面全景（北東から）
 写真図版 9
- 11区第1遭構検出面杭列跡検出状況
 （北東から）
 11区第2遭構検出面全景（南西から）
 11区土層堆積状況（北西から）
 11区第2遭構検出面炭化物集積検出状況
 （南西から）
 機械掘削状況（南西から）
 人力掘削状況 1（西から）
 人力掘削状況 2（南西から）
 写真図版 10
- 出土遺物（1～9）
 出土遺物（土師器、須恵器）

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

宅原遺跡群は神戸市北区長尾町宅原～上津に位置する。神戸市は、兵庫県の南東部に位置する政令指定都市で、県下第1位の人口を誇る。市域は南北約30km、東西約36km、面積は約1550km²と広く、北側は三田市、北東側は宝塚市・西宮市、西側は明石市・三木市・稻美町と接し、南側は瀬戸内海に面する。

遺跡群の位置は神戸市の北端部にあたり、その範囲は東西約2km、南北約1kmと広範囲に及ぶ。古第三紀中期始新世から初期漸新世に形成された神戸層群を武庫川の支流である長尾川が浸食して生じた小盆地内に立地し、丘陵裾から河岸段丘、低地までをその範囲に含む。現況は、大部分が耕作地で、その中に民家等が点在する。なお、本調査の対象範囲は、長尾川北岸の丘陵裾部に位置し、遺跡群の北部にあたる。全域が県道17号西脇三田線路線内に位置し、現道路面の標高は約168mである。

第2節 歴史的環境

宅原遺跡群内で旧石器時代に属する遺構・遺物は確認されていないが、北東約2.5kmに位置する天神遺跡ではナイフ形石器等が出土している。また、北西約8kmに位置する溝口遺跡ではナイフ形石器や台形石器等の出土に加え、石器集中地点が検出されており、遺跡群周辺での人類の活動痕跡が見出される。

縄文時代には、宅原遺跡群内で縄文時代後期の土器が出土している。遺跡群の西方約1kmに位置する竜ヶ坪遺跡（5）においても、同時期の石器工房跡や石礎、石匙等が検出されており、遅くとも後期には長尾川により形成された小盆地内に集落が営まれ始めたことが分かる。

弥生時代に入ると、更に積極的な土地利用が開始され、宅原遺跡群東部では後期の堅穴住居跡や溝等が確認される。遺跡群の東約1.5kmに位置する塙田遺跡では、中期以降の堅穴住居跡と共に、石包丁等の石器や木器が多数出土している。他にも遺跡群南東の丘陵先端に位置する北神N.T.No.4遺跡（26）は中期末～後期にかけての高地性集落と考えられており、堅穴住居跡や箱式石棺が検出されている。

古墳時代には、宅原遺跡群では当該期の堅穴住居跡や掘立柱建物跡が多数検出され、比較的大規模な集落であったことが想定される。堅穴住居跡の中には鉄滓やふいご口が出土するものも確認できる。同時期の集落としては、日下部遺跡（30）や八多中遺跡、二郎宮ノ前遺跡がある。中でも遺跡群南東約2.5kmに位置する二郎宮ノ前遺跡では後期の堅穴住居跡が多数検出されている。宅原遺跡群の南北の丘陵上には、弥生時代末～古墳時代初頭に定塙古墳群（15）が、4世紀末～5世紀初頭に北神N.T.No.9遺跡1号墳が築かれる。その後、しばらく古墳建築は下火になるものの、後期には再び北側の丘陵上に寺谷群集墳（10・11）や奥田群集墳（13・14）、炭焼群集墳（16）等、多くの古墳が築かれるようになる。

古代には宅原遺跡群一帯は撫津国有馬郡幡鄉に属する。これまでの宅原遺跡群の調査では飛鳥時代から奈良時代にかけて、掘立柱建物群や大溝等の遺構から「評」、「郷長」等の墨書き器や硯、人形といった官衙的性格の強い遺物が出土しており、遺跡群周辺に「有馬郡衙」の存在が想定されている。同時期の遺跡には、南東約2kmの地点に日下部北遺跡が立地しており、流路中から土器が大量に出土している。

宅原遺跡群は奈良時代後半～平安時代には一時縮小傾向となるものの、平安時代末～中世にかけて再度盛行する。遺跡群南半では、掘立柱建物跡や池状遺構に加え、墨書き器や呪符木簡が出土しており、「宅原莊」との関連が指摘される。西側に隣接する上津遺跡（2）においても、中世の掘立柱建物跡や木棺墓等が確認されており、遺跡群の所在する小盆地が広く生活域として利用されていたと考えられる。

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

三田西宮連絡管 送水管布設工事(長尾工区)は、兵庫県企業庁猪名川広域水道事務所(以下、猪名川広域水道事務所と呼称する。)所管の事業で、県道定塚四軒茶屋線、県道西脇三田線、市道上津谷線の車道下に送水管を埋設する事業である。その事業区間のうち、神戸市北区長尾町上津地内には「上津遺跡(県遺跡番号: 015017)」が、同長尾町宅原地内には「宅原遺跡群(県遺跡番号: 015017)」が存在することから、平成31年2月4日付け企猪第1193号及び同第1194号によって、両埋蔵文化財包蔵地内の工事に伴い、文化財保護法第94条に基づく通知がなされた。同通知に対しては、兵庫県教育長から、「工事区域が狭小で、安全上、通常の発掘調査の実施が著しく困難」であるため、工事の施工にあたっては、埋蔵文化財専門職員による立会を求める旨の指示・勧告が發せられた(平成31年3月7日付け教文第2763号・同第2764号)。

その後、猪名川広域水道事務所と兵庫県教育委員会が協議を行った結果、施工予定地は全域が現道に当たり、交通規制の制約上、掘削・管の埋設・舗装の復旧までを同日に完了する必要があること、事業区間が約4.5kmと非常に長距離に及び、全区間の工事に立ち会うことは非現実的であると判断されたことから、分布調査・確認調査により、工事立会を実施する箇所の精査を行うこととなった。

以上の経緯を受け、兵庫県教育委員会では令和元年度に分布調査(調査番号: 2019030)を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地範囲及びその周辺部において埋蔵文化財が存在する可能性の検討を行った。分布調査の結果、調査対象範囲の複数の地点で土器片の散布が確認できたことから、猪名川広域水道事務所長からの依頼(令和元年10月23日付け企猪第1109号)に基づき、令和元年度～2年度にかけて、確認調査(2019064・2019065・2020030・2020031)を実施することとなった。確認調査では、対象範囲の大部分が水成堆積層で構成されており、遺構が形成されうる地盤は確認できなかつたものの、「宅原遺跡群」の一部において柱穴等の遺構や多量の土器片が確認でき、埋蔵文化財の存在が明らかとなつた。この成果を受け、工事立会は「宅原遺跡群」範囲内的一部に限定して実施することとなった。

第2節 各調査の概要

1. 分布調査

遺跡調査番号: 2019030

所 在 地: 神戸市北区

調 査 主 体: 兵庫県教育委員会

調査担当者: 兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 鐵英記・渡瀬健太

調 査 期 間: 令和元年5月21日(実働1日)

調 査 面 積: 約8,500m²

概 要: 事業区間全域の踏査を実施し、現地の地形や遺物の散布状況の確認を行つた。なお、施工箇所は県道及び市道であり、遺物の散布状況を確認することが困難であったことから、周辺の田畠も併せて踏査を行つた。

踏査の結果、事業区間が周知の埋蔵文化財包蔵地である「上津遺跡」及び「宅原遺跡群」内を通ることを改めて確認した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地外についても、

隣接する田畠で遺物の散布が認められる箇所が複数認められた。

2. 確認調査

遺跡調査番号：2019064・2019065・2020030・2020031

所 在 地：神戸市北区

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 渡瀬健太

調査期間：令和2年3月18日～令和2年5月29日（実働39日）

調査面積：163m²

概 要： 分布調査において、埋蔵文化財が存在する可能性を指摘した範囲を対象として、令和元年度～2年度にかけて、計39箇所に調査トレンチ（T 1～39）を設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。また、調査中に既存埋設管の位置確認のための試掘を行つたため、当該箇所（埋設管試掘坑）においても埋蔵文化財の有無を確認した。

T 1～14は「上津遺跡」範囲内及びその周辺部にあたる。全てのトレンチで古墳時代～中世と考えられる土器片がわずかに出土したが、水成堆積物が厚く広がる箇所が大部分を占め、中世以前の遺構が形成されうる安定した地盤は確認できなかつた。

T 15～39、埋設管試掘坑は「宅原遺跡群」範囲内及びその周辺部にあたる。T 1～14と同様、水成堆積層が厚く堆積する箇所が多いものの、T 27～28・T 31～34・埋設管試掘坑では、古墳時代～中世の須恵器片・土師器片が多く出土し、柱穴や土坑等の遺構も確認することができた。

なお、調査対象とはしなかつたが、近世以降の遺構（溝、石積み）や遺物（陶磁器、鉄釘）は、複数のトレンチで確認できた。

3. 工事立会

遺跡調査番号：2020059

所 在 地：神戸市北区長尾町宅原

調査主体：兵庫県教育委員会

調査担当者：兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 渡瀬健太

調査期間：令和2年9月1日～18日（実働11日）

調査面積：70m²

第3節 出土品整理作業の概要

調査成果の整理作業は、令和4年度に出土遺物の洗浄・接合・補強・実測・復元・写真撮影、遺物実測図及び遺構図面等のトレース・レイアウト、原稿執筆を行い、編集作業の後、本報告の刊行に至つた。

調査担当者：公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部企画調整課 渡瀬健太
整理担当者：同部整理保存課 深江英憲、別府洋二、西口圭介、大嶋昭海、野田優人

整理技術員 柏原美音、森本貴子、宮田麻子、小野潤子、亀井彩菜、岡崎眞子、

新山王綾子、藤田久範

第3章 宅原遺跡群の調査

第1節 調査の概要と基本層序

宅原遺跡群は、神戸市北端部の北区長尾町上津～宅原に位置し、水道管布設ルートは主に長尾川により形成された河岸段丘上に計画されている。工事立会対象範囲は県道17号西脇三田線内である。交通規制の制約により、3.5～6mに区切って各区の掘削及び調査を行い、同日中に埋戻しを行った。調査は、南西から北東に向かって順番に実施した。以下、南西側から順に1区～11区と呼称する。

基本層序は上からアスファルト舗装面、道路敷設に伴う盛土層、それ以前の造成に伴う埋立土層（以下、舗装面及び盛土層、埋立土層を合わせて「現代盛土層」と呼称する）、旧耕土と考えられる暗灰～褐灰黄色シルト～細砂層（第1層）、中世以降の遺物包含層と考えられる灰～灰白色シルト～細砂層（第2層）、弥生土器片や古墳時代の土師器片をわずかに含む灰白色シルト～極細砂層（第10層）、褐色～淡灰黄色シルト～細砂層（第12層）となる。第12層の下部は東西で様相が異なり、西側（1～5区）では灰白色シルト混じり細砂～粗砂層（第15層）、灰白色シルト～細砂層（第17層）、灰色シルト混じり細砂～中砂層（第18層）となり、東側（6～11区）では土師器小片をまばらに含む黄灰色シルト層（第13層）、弥生土器や土師器の細片、炭化物をわずかに含む灰色中砂～粗砂層（第14層）、淡黄灰色シルト層（第16層）となる。

第2節 各調査区の概要

1区 (図版3 写真図版1・2)

現地表下から最大で2.2mまで掘削を行った。上から順に、現代盛土層、第1層、第2層、第12層、第17層となる。

遺構は第12層上面で柱穴を4基（SP01～SP04）確認した。いずれも径20～25cm程度の小規模なもので、SP04中には柱材が遺存していた。

遺物は第1層中から近世以降の陶磁器片が、第2層中から土師器の小片がわずかに出土した。

2区 (図版4 写真図版2・3)

現地表下から最大で2.2mまで掘削を行った。堆積状況は1区と同様である。

遺構は第12層上面で柱穴5基（SP05～SP09）、流路1条（SR01）を検出した。SP05、SP07～SP09は径約20cm程度の小規模なものであるが、SP06は比較的大きく、径30cmを超える。SR01は北西から南東方向に向かって流れている。2区での検出幅は約3.2mで、3区へと続く。工事による掘削が及ぼないことから、底部までの掘削は行っていないが、深さは中央部で遺構検出面から50cm以上となる。

遺物は第1層から近世以降の陶磁器片が、第2層中から弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。小片のため詳細は不明であるが、古代～中世の須恵器碗が確認できる。その他、SR01埋土中より土師器の甕（9）や高杯が出土した。

3区 (図版5 写真図版3)

現地表下から最大で2.1mまで掘削を行った。堆積状況は1、2区と同様である。

遺構は第12層上面でSR01の延長部を検出した。3区での検出幅は約3.4mである。SR01の肩部では、古

墳時代終末期のものとみられる甕（2）が、横に倒れた状態で検出された。体部の半分程度が後世の削平を受けて失われているが、ほぼ完形に復元でき、原位置を保っているものと考えられる。

遺物は第1層中から近世以降の陶磁器片が、第2層中から土師器、須恵器の小片が出土した。須恵器片の中には中世に位置づけられる椀も確認できる。また、SR01埋土中からは先述の土師器甕の他、弥生土器や土師器の小片が出土している。

4 区（図版6 写真図版3・4）

現地表下から最大で2.1mまで掘削を行った。道路の造成工事によって第1層は失われており、現代盛土層下部は上から順に第2層、第12層となる。また、遺構検出を行った後、第12層の一部を断割り、下層確認を行った結果、上から順に第15層、第17層、第18層の堆積が認められた。第15層、第17～18層は、土質の特徴から水成堆積層と考えられ、第12層堆積以前は不安定な地形であったとみられる。

遺構は第12層上面において、柱穴3基（SP10～SP12）を検出した。SP10は径約30cm、SP11はやや小規模で径約24cm、SP12は比較的大型で短径約40cmを測る。

遺物は第2層中から土師器、須恵器の小片が出土した。遺物の出土量は少ない。

5 区（図版7 写真図版4・5）

現地表下から最大で1.9mまで掘削を行った。現代盛土層の下部は、上から順に第1層、第2層、第12層、第15層となる。第12層上面で精査を行ったが、遺構を確認することはできなかった。

遺物は第1層中から土師器の細片が、第2層中から土師器、須恵器の小片が出土した。出土した須恵器片の中には、中世前半頃とみられる回転糸切りの皿も確認できる。また、第12層中からは摩耗の進んだ土師器片がわずかに出土している。

6 区（図版8 写真図版5）

現地表下から最大で1.8mまで掘削を行った。北半部がコンクリート殻を多く含む擾乱により、破壊されている。現代盛土層の下部は、上から順に第1層、第2層、第10層、第12層となる。

遺構は第12層上面で大型の堅穴状遺構（SX01）を検出した。6区での検出幅は約1.8mで、7区へと続く。深さは16cmである。埋土は灰白色シルト～極細砂で、下面から4～5cm程度の厚みで、炭化物が常に堆積する。なお、SX01内で柱穴や炉跡等は確認できなかった。

遺物は第2層中から土師器、須恵器の小片、焼土塊が出土した。器種が特定できたものとしては、須恵器の皿がある。その他、SX01埋土中より摩耗の進んだ土師器小片がわずかに出土している。

7 区（図版9 写真図版5・6）

現地表下から最大で1.8mまで掘削を行った。堆積状況は6区と同様である。

遺構は第10層上面において、流路1条（SR02）を検出した。流向は西→東である。幅は約1.1mで、調査区外へと延びる。検出面からの深さは中央部で、45cmを測る。埋土は3層に分層でき、上から順に、灰褐色シルト～極細砂層（第6層）、土師器の細片や炭化物を含む灰色シルト質極細砂～細砂層（第7層）、炭化物を含む灰色シルト～極細砂層（第9層）となる。また、第12層上面で6区から引き続きSX01を確認できた。部分的にSR02により切られるものの、埋土は調査区全面で認められ、深さは西側で8cm、東

側で20cmを測る。6区と同様に、床面には炭化物が4～5cm程度の厚みで広がる。

遺物は第2層中より土師器、須恵器片が出土した。器種等が判断できるものには、中世前半とみられる須恵器楕や須恵器壺がある。須恵器楕は平底で、底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものと、回転糸切りによるものが認められる。SX01埋土中からは土師器の小片に加え、須恵器片が1点出土した。細片のため詳細は不明であるが、器厚が薄いことから、杯や楕といった小型の器種と考えられる。また、SR02埋土の第7層中からも、須恵器の細片が出土している。

8区 (図版10 写真図版6)

現地表下から最大で1.9mまで掘削を行った。堆積状況は6、7区と同様で、第12層の下には第14層及び第16層が認められる。第14層中には炭化物や土師器の細片がわずかに含まれるが、堆積物の粒度が粗いことから水成堆積層とみられる。第14層及び第16層では、遺構は確認できなかった。

遺構は調査区西端で第10層上面から掘り込まれるSR02と第12層上面から掘り込まれるSX01を検出した。SR02では7区で認められた第7層と第9層の間に、灰黄色シルト～細砂層（第8層）が確認できる。深さは約44cmである。SX01は深さ約20cmで、6、7区と同様に下面に炭化物が密に堆積する。

遺物は第2層中から土師器、須恵器、磁器の小片が出土した。器種が特定できるものとしては、中世前半（11～13世紀）に位置づけられる須恵器楕や白磁碗がある。須恵器楕には平底のもの他、平高台で見込部が一段落ち込むものも確認できる。第10層・第14層からは土師器の細片がわずかに出土している。また、SR02埋土（第7層）中から、土師器片が1点出土した。

9区 (図版11 写真図版6・7)

現地表下から最大で2.0mまで掘削を行った。堆積状況は6～8区と同様である。第10層、第12層の上面で精査を行ったが、遺構を確認することはできなかった。

遺物は第2層中から土師器、須恵器、瓦器の小片が出土した。器種が特定できたものには中世前半に位置づけられる須恵器楕や甕がある。第12層、第14層からは土師器の細片がわずかに出土した。

10区 (図版12 写真図版7)

現地表下から最大で2.0mまで掘削を行った。現代盛土層以下は、上から順に第1層、第2層、第10層、第12層、第13層、第14層となる。

遺構は調査区北東側において、第10層上面で土坑1基（SK01）及び杭跡と思われるビットを検出した。SK01は検出長約20cm、検出幅約16cmで、11区へと続く。検出面からの深さは14cmである。杭跡と思われるビットは径約18cmで、木材がわずかに遺存する。

遺物は第2層から土師器、須恵器、瓦器が出土した。器種が特定できるものとしては、土師器の羽釜や回転糸切りの須恵器楕があり、中世前半のものが主体を占める。第10層、第13層中からは土師器片の小片がまばらに出土した。また、SK01埋土（第3層）中からは、須恵器楕の口縁部片（7）が1点出土しており、第2層の出土遺物と同様に、中世前半に位置づけられる。

11区 (図版13 写真図版7・8)

現地表下から最大で2.1mまで掘削を行った。堆積状況は10区と同様である。

遺構は第10層上面において、調査区北西隅でSK01の続きを、中央部で杭列跡を検出した。SK01の11区での検出長は46cm、検出幅は22cm、深さは16cmである。杭跡は20本分確認でき、東西方向に連なる。各杭の直径は5～13cmである。また、第12層上面において、炭化物の集積を検出したが、その平面形は歪で、掘り方も非常に浅く、不明瞭である。

遺物は第2層から土師器、須恵器の小片が出土した。須恵器にはMT15型式期に位置づけられる杯蓋や中世前半と考えられる碗や甕、壺等が認められる。第10層、第13層中からは土師器の細片がわずかに出土している。また、SK01埋土（第3層）中からは、10区と同様に中世前半かと思われる須恵器碗体部片（8）が1点出土した。

第3節 遺構

遺構は第10層及び第12層上面で検出を行った。土坑（SK01）、柱穴（SP01～SP12）、底面に炭化物が敷き詰められた大型の堅穴状遺構（SX01）、流路（SR01・SR02）、杭跡、炭化物の集積が確認できる。調査区東半部（6～11区）では上下2面の遺構面が確認できるが、西半部（1～5区）では同一面となる。第1遺構検出面の標高はT.P166.80～166.96m、第2遺構検出面の標高はT.P166.52～166.84mで、同一面で検出した箇所での標高はT.P166.20～167.00mである。

SK01は第1遺構検出面上で10・11区にかけて確認した。北側半分が調査区外へと延びるため、詳細には不明であるが、隅丸方形を呈するとみられ、規模は長さ72cm、検出幅30cm、深さ16cmを測る。埋土中には炭化物や須恵器の小片をわずかに含む。出土遺物から12～13世紀代のものと考えられる。

柱穴は1～4区で合計12基確認できた。いずれも第12層上面（第2遺構検出面）で検出されたが、第1遺構検出面と同一面となる範囲内にあたる。平面形は概ね径20～25cm程度の円形もしくは梢円形を呈するが、SP06は径30cm、SP10は径30～34cm、SP12は径40～45cmと比較的大きい。SP04中には柱材が遺存していた。また、SP10の柱根底部には、径10cm程度の亜円襖が1石確認でき、柱の沈み込みを防ぐための根石であった可能性が考えられる。調査区幅が狭小であったこともあり、今回調査を行った範囲で掘立柱建物に復元できる柱穴は見出しがたい。埋土中からの遺物の出土がなく、時期の検討は困難であるが、いずれも後述のSR01と同一面での検出であることから、古墳時代終末期の可能性がある。

SX01は6区から8区にかけて、第2遺構検出面上で確認した。延長は1.5m以上、幅は約5.8m、残存深度は8～20cmである。調査区の制約上、部分的な検出に留まつたが、東辺・西辺が直線的ではなく平行することから、全形は方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。底面全面に4～5cm程度の厚みの炭化物層が確認できる。柱穴や炉跡等は確認できず、上部構造は不明である。当初、焼失住居である可能性を考えて調査を行ったが、少なくとも調査区内に被熱痕跡は確認できず、堆積する炭化物も細片で、柱や垂木等形状を復元しうるもののが全く認められないことから、炭化物層は火災により形成されたものとは考え難い。1987年に行われた宅原遺跡群南半部の調査では、8～9世紀頃の遺構として、1.5m四方、深さ15cm程度で、床面中央に2～3cmの炭化物層をもつ「堅穴状遺構」が検出されている。この「堅穴状遺構」も被熱痕跡は確認されておらず、「性格については判断する材料に乏しい」という注釈付きではあるが、「炭小屋のような、居住地に付随する施設」である可能性が指摘されている。規模に大きな違いはあるものの、その堆積状況の類似性から、SX01もこの「堅穴状遺構」と同様の性格を有していた可能性も考えられよう。時期は古墳時代終末期～古代初頭にかけてのものと考えられる。

SR01は2区から3区にかけて、第2遺構検出面上で検出した。北西-南西方向に延びる流路で、幅は

約7mを測る。工事による掘削が及ぼなかつたことから、底面の検出には至っていない。埋土は青灰色シルト層（第5層）で、2区北壁沿いでは部分的に第5層を切り込むように、灰色シルト混じり細砂～極粗砂層（第4層）が確認できる。第5層中から土師器片や弥生土器片が出土したほか、東岸部で古墳時代終末期のものとみられる甕（2）が、横倒しとなった状態で検出された。原位置を保っているとみられ、SR01が古墳時代終末期には水汲み場等として利用されていたことが想定できる。

SR02は7区から8区にかけて検出した。第1遺構検出面から掘り込まれ、SX01を切る。西から東に向かって延びる流路で、幅は約1.1mである。埋土は大きく3層に分層でき、上層（第7層）には炭化物及び土師器片が含まれる。中層（第8層）・下層（第9層）中からの遺物の出土は認められなかった。

杭列跡は11区で東西方向に並んで確認できた。各杭の直径は5～13cmとバラつきが大きい。杭列よりも北東側はグライ化しており、調査区北東部が水気の多い状況であったことが想定できる。北側の丘陵は櫛齒状に小規模な谷が複数形成されており、杭列の東側にはこれらの谷につながる旧河道が存在していた可能性も考えられる。

炭化物の集積は11区第2遺構検出面で確認した。南北約80cm、東西約60cmの不整形を呈する。掘り方は明瞭でなく、炭化物層も薄く残るのみであったことから、その性格は不明である。

第4節 遺物（図版15 写真図版9・10）

遺構からの遺物の出土は少なく、多くが遺物包含層から出土した。遺物はほとんどが小片で、SR01出土の甕（2）を除き、全形を復元できるものは認められない。

上層遺物包含層である第2層中からは古墳時代～中世に位置づけられる土師器や須恵器、陶磁器が出土した。器種・型式等が判断できるものとしては、TK47～MT15型式期とみられる須恵器蓋杯、中世前半とみられる須恵器碗や皿、鉢、壺、同じく中世前半と考えられる白磁碗等があり、幅広い時期の遺物を包含している。中でも、須恵器の碗の出土数が最も多く確認できる。層中の出土遺物で最も新しいものは13世紀とみられることから、上層遺物包含層の形成時期も概ね13世紀代であると考えられる。

下層遺物包含層である第10層は部分的に確認できた。層中からは弥生土器片や古墳時代の土師器片が少量出土している。下層遺物包含層出土遺物はいずれも摩耗が進んでおり、詳細な時期の検討はできなかったが、下層遺物包含層堆積以前に形成されたSX01中から須恵器の細片が出土していることから、下層遺物包含層は少なくとも古墳時代中期以降に形成されたものであることがわかる。

また、工事による影響が及ぼないことから部分的な検出に留まったものの、第2遺構検出面より下部の第13・第14層中からは弥生土器片、土師器片がわずかに出土した。各層で遺構の存在は確認できなかったものの、より深い位置に古墳時代前期以前の機能面が遺存している可能性も考えられる。

國化は比較的の残りが良く、型式や製作技法、所属時期等の検討が可能な6点（1～6）を対象とした。

1は土師器の高杯である。11区下層遺物包含層より出土した。杯部の大部分及び脚端部は欠損している。残存器高は6.1cmを測る。外面には白色の化粧土を塗布している。全体的に摩耗が進んでおり、調整は不明である。脚部と杯部との接合は付加法による。

2は土師器の甕である。3区SR01の北東側から出土した。横に倒れた状態で検出され、胴部の半分ほどが欠損しているものの、全形に復元することができ、原位置を保っているものと考えられる。球形の体部から、口縁部がゆるく外反して開き、端部は丸く收まる。復元口径は23.5cm、復元器高は26.1cmである。調整は体部から底部にかけて外面には縱方向のハケメが、内面には肩部に横方向のハケメが施さ

れる。また、肩部以下には黒斑が認められ、下半部にはススが付着している。古墳時代終末期（7世紀）に属するものと考えられる。そのほか、残存状況が悪く図示し得なかつたが、SR01埋土（第5層）中からは、土師器の高杯脚部が出土している（写真図版10土師器最下段右端）。裾部が屈曲して広がる形状で、屈曲部より上に横方向のケズリが施される。

3は須恵器の椀である。10区の上層遺物包含層から出土した。底部から体部下半までが残る。底部は平底で、体部はわずかに丸みを帯びる。復元底径は6.6cm、残存器高は2.8cmである。底部の切り離しは回転糸切りによる。体部は外面ともに回転ナデにより調整され、底部内面には不定方向のナデが施される。同様の特徴をもつ須恵器椀の破片は比較的多く出土しており、12世紀代に位置づけられる。

4は須恵器の鉢である。確認調査のT25調査時に、上層遺物包含層に相当する土層から出土した。なお、T25は長尾川南岸、今回の工事立会対象範囲から西に300m程度離れた地点に位置する。口縁一部のみが残り、復元口径は26.8cmである。口縁端部は上下に突出し、面を形成する。口縁部の面は器壁に対して外傾し、丸みを帯びる。全体が回転ナデにより調整され、口縁端部の面には自然軸の付着が認められる。13世紀代の所産と考えられる。他にも同時期の須恵器鉢の破片が複数出土している。

5は白磁碗である。8区上層遺物包含層から出土した。底部から体部下半までが残存する。低い逆台形状の高台がつき、疊付外端は若干浮く。底部内面の外周には段状の圖線を回す。外面は底部から1.5cmの範囲は露胎となり、それより上部及び内面全体には釉薬が施される。釉薬の色調は灰緑色を帯びる。他にも白磁碗の体部とみられる破片が少量出土しており、いずれも13世紀のものと考えられる。

6は備前焼の擂鉢である。確認調査のT39調査時に近世遺物包含層より出土した。T39は工事立会対象範囲から東に約650mの地点に位置する。底部から体部下半までが残存する。底部は平底で、復元底径は11.2cm、体部の器厚は1.0~1.2cmである。体部内外面～見込部にかけては回転ナデ、底部はナデで仕上げる。体部内面の擂目は1単位10条のクシ描きで、放射状に引いた上から、反時計回りに上がる斜め方向の擂目を施す。見込部の擂目は残存状況が悪く、1単位の条数は不明であるが、「×」もしくは「*」字状となると考えられる。体部外面下端にはススが付着しており、火にかけられた可能性が高い。擂目の特徴から、16世紀後半~17世紀初頭にかけてのものとみられる。なお、工事立会対象範囲では、近現代の遺物を含む旧耕土層（第1層）の直下は、中世までの遺物を含む上層遺物包含層となっており、近世の遺物包含層を確認することはできなかったが、確認調査ではT39の他にも、工事立会対象範囲西側に位置するT10、12、14~16、20、24、25、30、東側に位置するT36、37で近世の遺物包含層や溝等の遺構が確認でき、染付磁器の小片や和釘等が出土した。事業用地の広範囲で近世の遺構や遺物が確認できることから、現道が敷設される以前は、今回の事業用地の大部分に近世以降の集落が広がっていたことが想定される。

7~9は写真撮影のみを行った。7は須恵器の椀口縁部、8は須恵器の椀体部である。ともにSK01埋土（第3層）中から出土した。接合はしないが、同一個体であった可能性もある。器厚はともに5mm程度で、外面ともに回転ナデで仕上げる。中世前半（12~13世紀代）に属するものと考えられる。

9は土師器の甕体部と考えられる。2区SR01埋土（第5層）中から出土した。厚みは2.5~3.0mm程度と非常に薄い。残存するのが体部のみであることに加え、外面ともに摩耗によって調整が定かでないことから、製作時期の検討は困難であるが、先述の通り、SR01中からは古墳時代終末期と考えられる土師器甕（2）が出土しており、9も近い時期の所産と考えられる。

第4章　まとめ

第1節　遺構

遺構は第10層の上面及び第12層の上面で検出できた。西半部では同一面となっているが、東半部では第10層の上面が第1遺構検出面、第12層の上面が第2遺構検出面となる。

遺構埋土及び各遺構検出面の上に堆積する遺物包含層の出土遺物から、第1遺構検出面は中世前半(12～13世紀)、第2遺構検出面は古墳時代終末期に位置づけられる。

確認した遺構は土坑1基(SK01)、柱穴12基(SP01～12)、流路2条(SR01～02)、堅穴状遺構1基(SX01)、杭跡、炭化物の集積である。SR01では、古墳時代終末期に位置づけられる甕が岸に置かれた状態で検出でき、当該期にSR01が水汲み場等の生活空間として利用されていたものと考えられる。また、第2遺構検出面でみられたSX01は幅6m程度の方形とみられ、底面に厚さ3～5cm程度の炭層が形成される。炭層は火災により形成されたものとは考えがたく、その性格は定かでないが、炭小屋等の施設であった可能性が挙げられる。SP01～12もSR01やSX01と同時期とみられる。今回の調査では、堅穴住居跡を検出することはできなかったものの、上記のように生活に関連する痕跡が複数見出されることから、本調査範囲に隣接して古墳時代終末期の集落が広がっていたものと想定できる。今回の調査対象範囲から東に約100mの地点では、神戸市教育委員会の調査により古墳時代前期～後期の堅穴住居跡が多数検出されており、長尾川北岸が古墳時代を通して居住域として利用されていたと考えられる。

中世の遺構としては、SK01及びSR02を検出した。遺構から当該期の集落の様相について検討することは困難であるが、後述の通り中世前半に位置づけられる土器が最も多く出土していることから、積極的な土地利用がなされていたことは確実であろう。

なお、本調査対象範囲では中世の遺物包含層の直上は近現代の耕作土層となっており、中世前半以降の動向を明らかにできなかったが、確認調査時には宅原遺跡群内や上津遺跡内で近世の溝や石積み等の遺構が確認できた。部分的な調査であるため詳細は不明であるが、中世前半以降も近世、現代に至るまで、当地が居住城や耕作地として利用され続けたものと考えられる。

第2節　遺物

確認調査及び工事立会を通して、弥生時代から近世まで、長期にわたる遺物の出土が確認できた。

弥生土器は下層遺物包含層からの出土で、いずれも摩耗が進んだ細片となっており、土砂の堆積過程で流入したものと考えられる。

古墳時代の土器は上層・下層遺物包含層及びSR01、SX01からの出土が確認できる。下層遺物包含層出土のものはいずれも土師器の細片で、弥生土器と同じく摩耗が進んでおり、器種や所属時期が特定できるものは認められない。上層遺物包含層からは、土師器片及び須恵器片が出土した。古墳時代と特定できるものの出土量は多くないが、TK47～MT15型式期と考えられる杯蓋も確認できる。SR01出土遺物には終末期に位置づけられる土師器甕(2)がある。SX01からは須恵器の細片が出土している。

古代の遺物は上層遺物包含層からつまみが扁平となった杯蓋が少量出土しているが、当該期の遺物量は非常に限定的で、積極的な土地利用が行われていなかったものと想定できる。

中世の遺物は上層遺物包含層やSK01から出土した。中世の前半期、11世紀～13世紀に位置づけられるもので、須恵器の椀(3)や皿、鉢(4)、白磁碗(5)等がある。全体を通して、中世の遺物の出土量

が最も多く、中でも12～13世紀に位置づけられる須恵器椀が特に多く出土している。

近世の遺物は、主に確認調査において検出できた近世の遺物包含層や構等の遺構埋土から出土した。16世紀後半～17世紀初頭に位置づけられる備前焼の播鉢（6）の他、染付磁器片、和釘等が確認できる。

第3節 結語

今回の工事立会は、対象範囲が幅約1.4m、延長約51mと非常に狭小であることに加え、終日の交通規制が不可能で、各区を1日で調査し、埋め戻しを完了させるという制約の大きい調査であったことから、検出した遺構の性格や相互関係等について、十分に把握できたとは言い難い。しかし、これまで調査例の希薄であった宅原遺跡群北端の丘陵裾部においても、多くの遺構・遺物が存在していたことを改めて確認することができた。

遺構・遺物は古墳時代終末期以降のものが主体を占め、遅くとも古墳時代終末期には集落が形成されたことが分かる。古代に入ると遺構は確認できず、遺物量も限定的となることから、一時衰退傾向にあったことが想定されるが、中世前半、特に12～13世紀にかけては遺物量が増加し、当地の集落は最盛期を迎えたと考えられる。なお、立会範囲では近世の遺構を検出できなかったが、確認調査では複数の地点で当該期の遺構・遺物が確認でき、集落が場所を移しつつ連続と営まれてきたことが想定される。

これまでの宅原遺跡群の調査では、7世紀中葉～8世紀初頭にかけて木製面や人形といった祭祀遺物や「評」、「五十戸口」、「郷長」等と書かれた墨書き器等、官衙的な施設の存在を窺わせる遺物が多く出土しており、当該期には当地に地域一帯を管理するための拠点的な施設が存在していたことが窺える。また、平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物も多数検出されており、当地周辺にあったとされる「宅原莊」との関連が考えられている。これらの調査成果は主に長尾川南岸に広がる河岸段丘上で確認できたものであるが、今回の調査によって、丘陵が迫り利用可能な土地が限られる長尾川北岸においても南岸と同様に、古墳時代終末期及び中世前半期の2時期に積極的な土地利用が行われたことが明らかとなった。

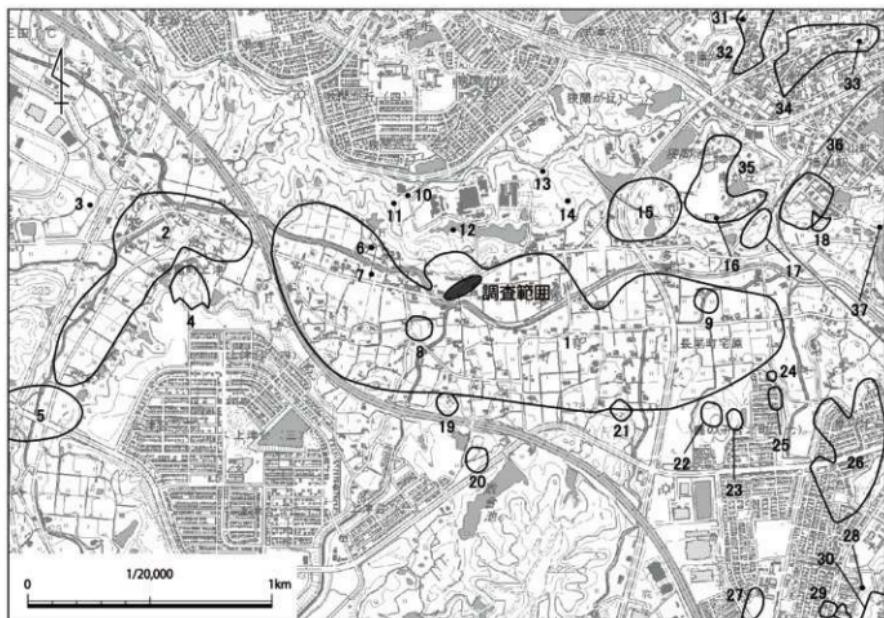
先述してきたように非常に限られた調査ではあったものの、古くから道路や宅地となっていたことで調査事例の乏しかった宅原遺跡群北部の遺構・遺物の分布状況について確認することができた。上層の遺構検出面でも現況地表面から約1.2m下と深い箇所に良好に残っており、調査を行った車道の両側にも遺構や遺物包含層が広がっているものと考えられる。本調査成果は、当地の歴史を検討していく上で、また今後周辺での開発事業と文化財保護の両立を図る上で、大きな参考になるものと期待している。

【主要参考文献】

- 神戸市教育委員会1990『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会1989『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会1992『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 三田市まちづくり部生涯学習支援室生涯学習課市史編さん担当編2010『三田市史 第8巻 考古編』 三田市
- 新修神戸市史編集委員会編1989『新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古』 神戸市
- 日本中世土器研究会編2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 長谷川眞2019「『びぜん』刻印を持つ播鉢」『兵庫陶芸美術館研究紀要』第8号 兵庫陶芸美術館
- 妙見山麓遺跡調査会1988『宅原遺跡・宮之元地区の調査(1986年)』
- 妙見山麓遺跡調査会1996『下上津遺跡』
- 妙見山麓遺跡調査会2002『宅原遺跡 豊浦地区の調査(1987年)』

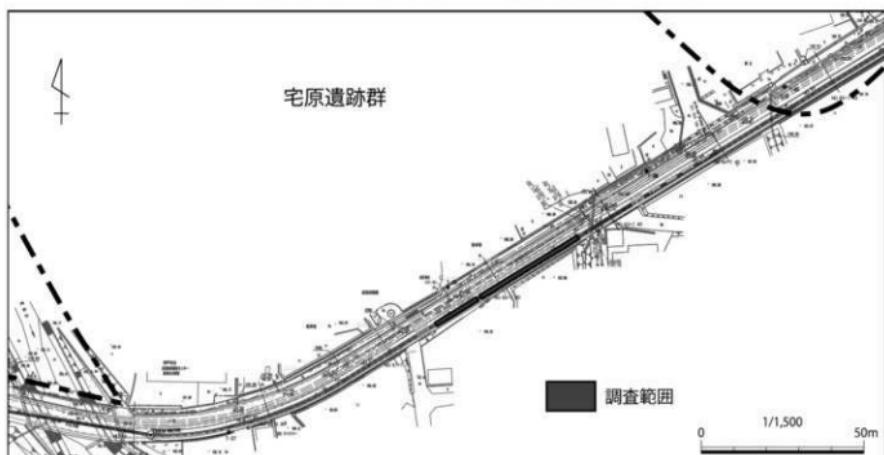
報 告 書 抄 錄

図版

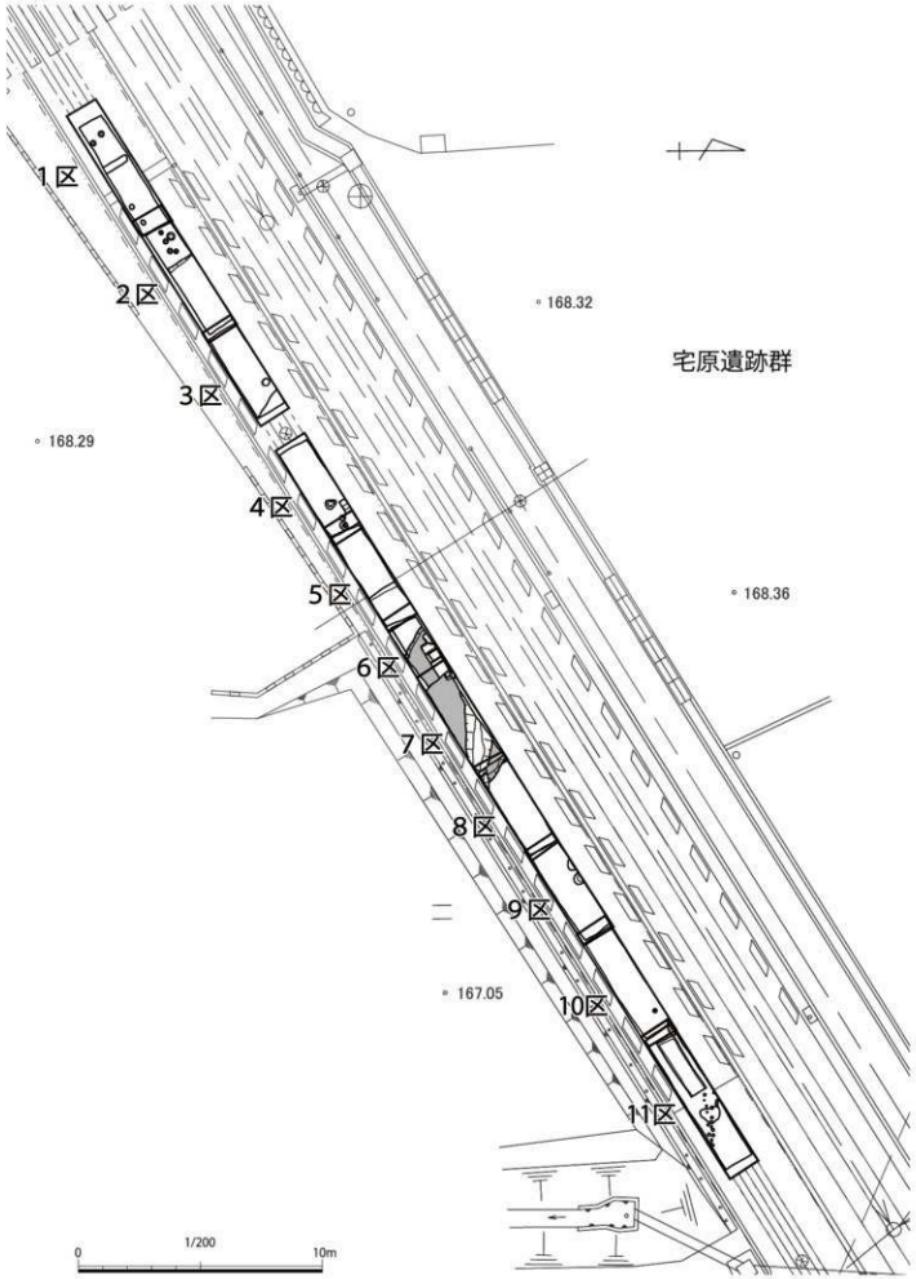


- | | | | | |
|-----------|-------------|-------------|-----------------|--------------|
| 1 宅原遺跡群 | 9 宅原条里 | 17 天皇山古墳群 | 25 北区No56遺跡 | 33 法泉寺址 |
| 2 上津遺跡 | 10 寺谷群集墳 | 18 鉢屋群集墳 | 26 北神N.T.No4遺跡 | 34 南が丘-打上り遺跡 |
| 3 上上津北古墳 | 11 寺谷群集墳 | 19 雲禪寺麻寺 | 27 北区No74遺跡 | 35 煙中遺跡 |
| 4 茶臼山城址 | 12 長尾小学校裏古墳 | 20 豊浦古墳群 | 28 北神N.T.No46遺跡 | 36 横山城跡 |
| 5 竜ヶ坪遺跡 | 13 奥田群集墳 | 21 普門邸 | 29 北神N.T.No47遺跡 | 37 墓山古墳 |
| 6 熊野神社前遺跡 | 14 奥田群集墳 | 22 宅原城跡 | 30 日下部遺跡 | |
| 7 熊野橋遺跡 | 15 定塚古墳群 | 23 北区No54遺跡 | 31 明王寺址 | |
| 8 上津条里 | 16 炭焼群集墳 | 24 北区No55遺跡 | 32 平家垣内遺跡 | |

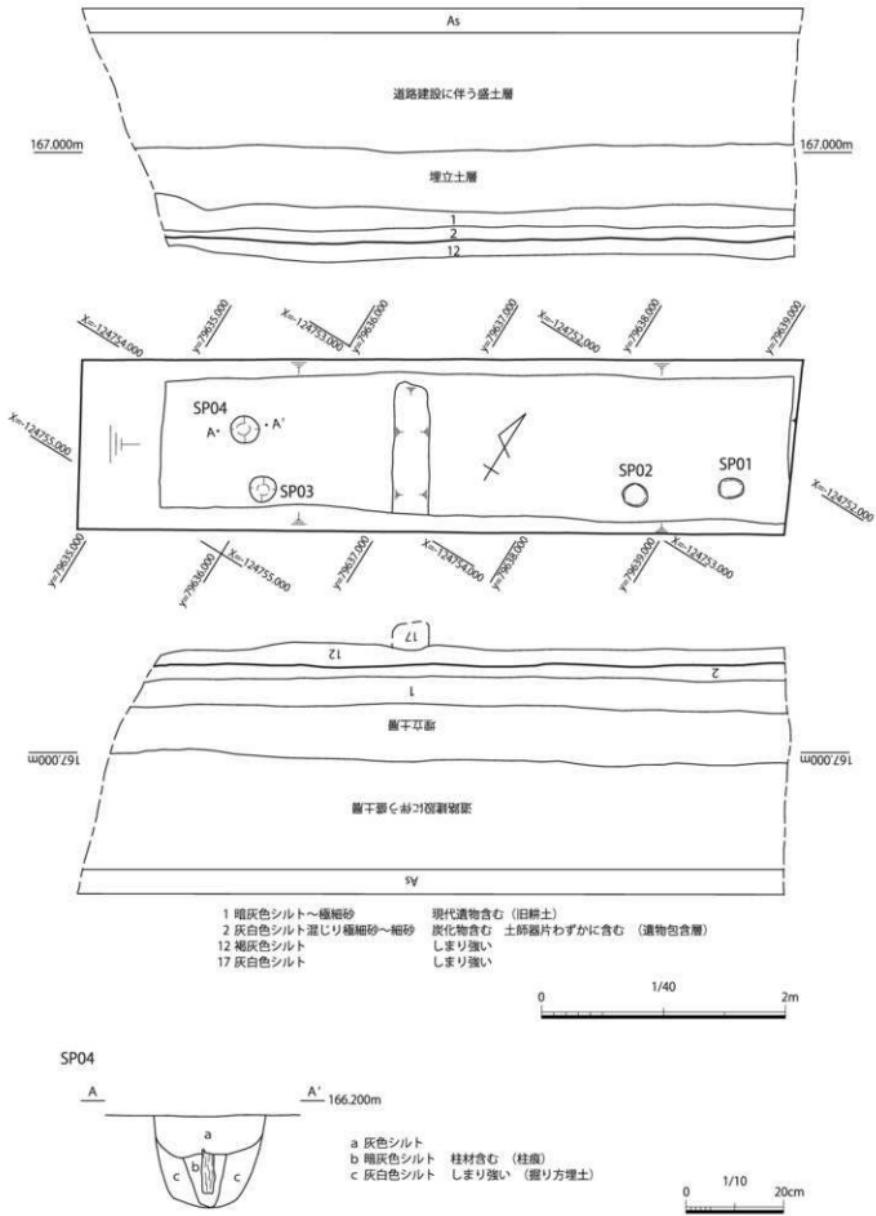
位置図 縮尺 1/20,000 『兵庫県遺跡地図』(図幅番号 77 を加工)



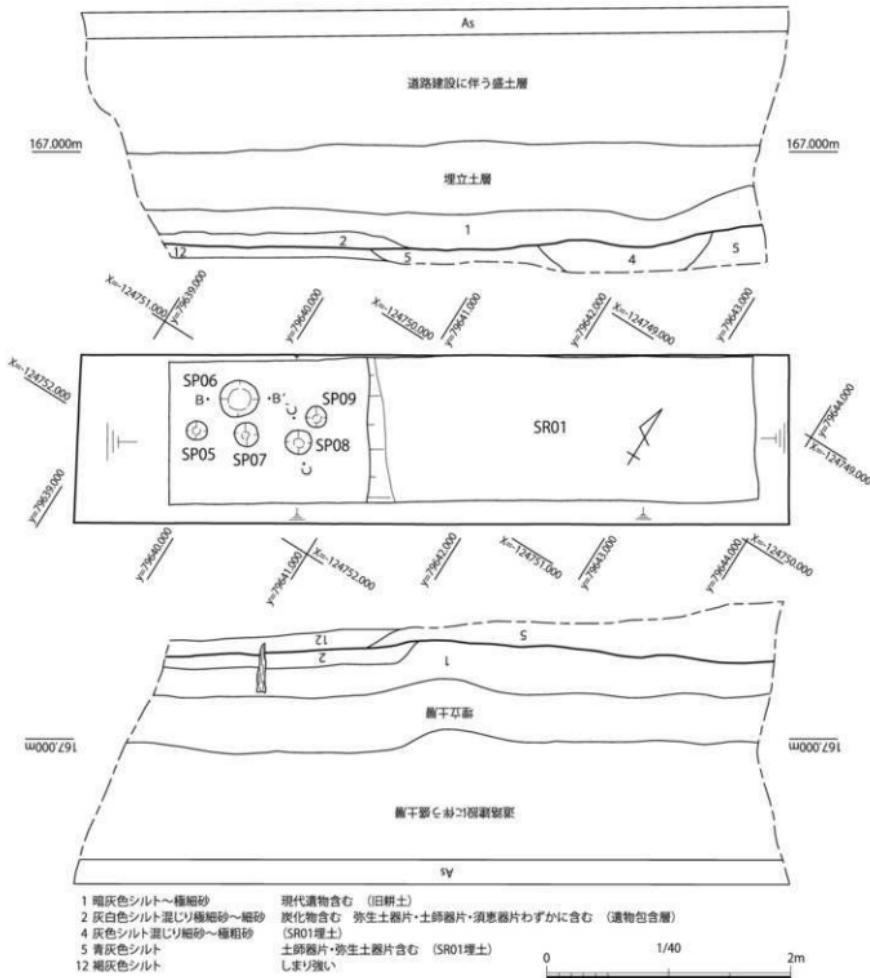
図版 2



宅原遺跡群調査対象範囲図



1区平面・断面図・遺構断面図

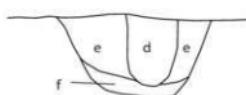


SP06

166.200m B

SP08

C' 166.200m



d 暗灰色シルト 炭化物含む (柱庭)

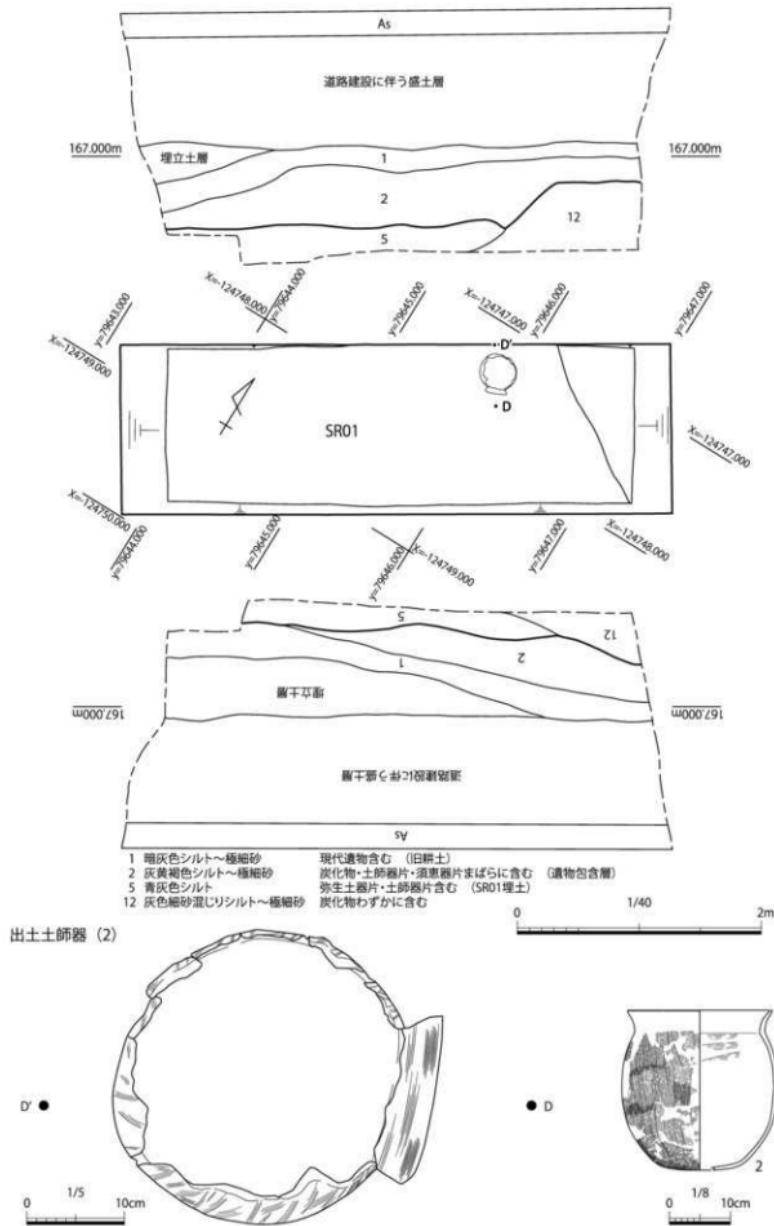
e 灰色シルト (掘り方理土)

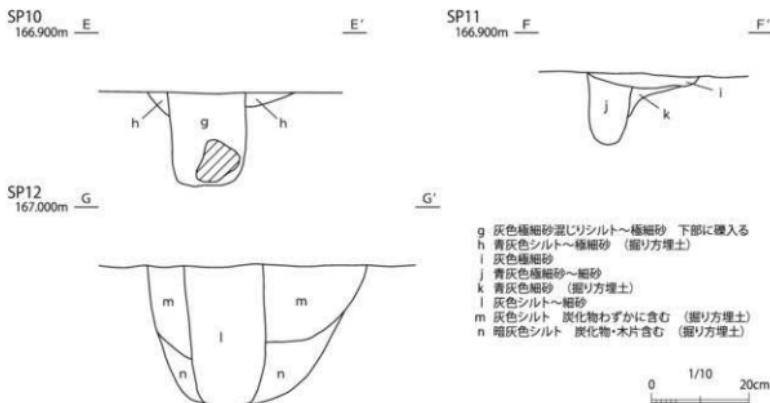
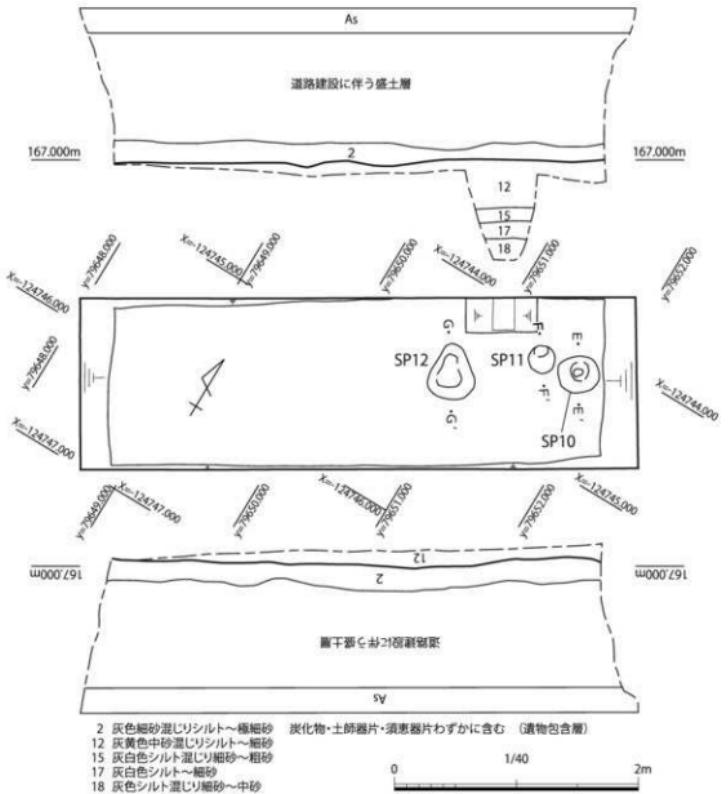
f 灰白色シルト (掘り方理土)



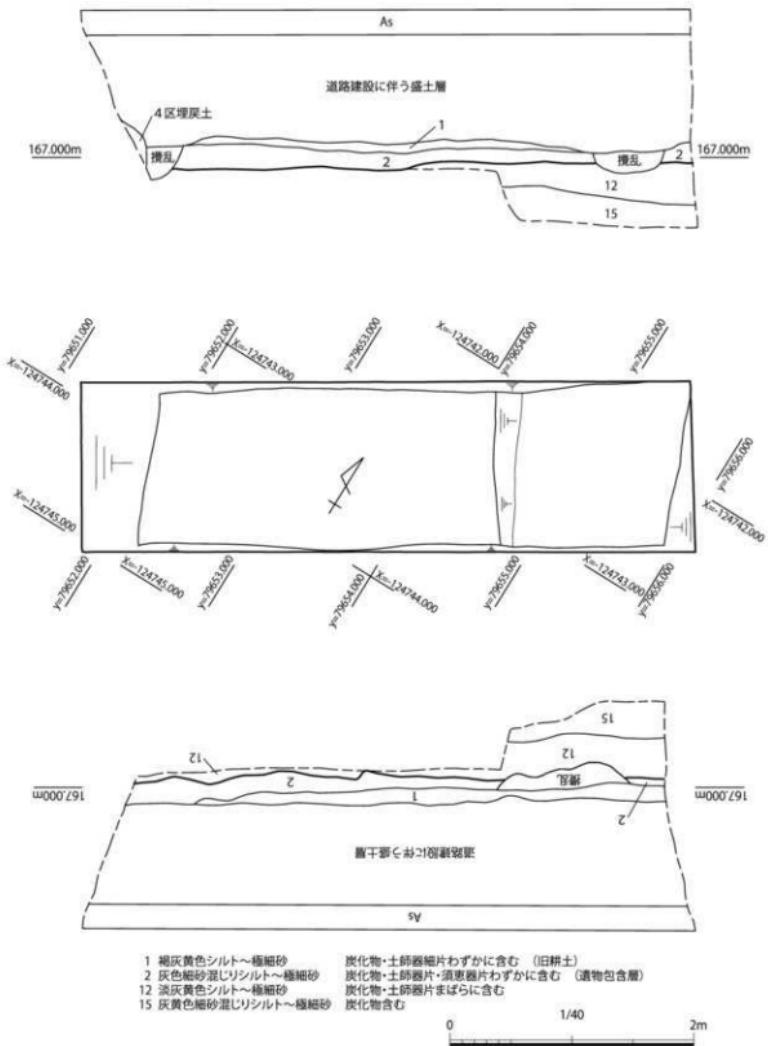
0 1/10 20cm

2区平面・断面図・遺構断面図

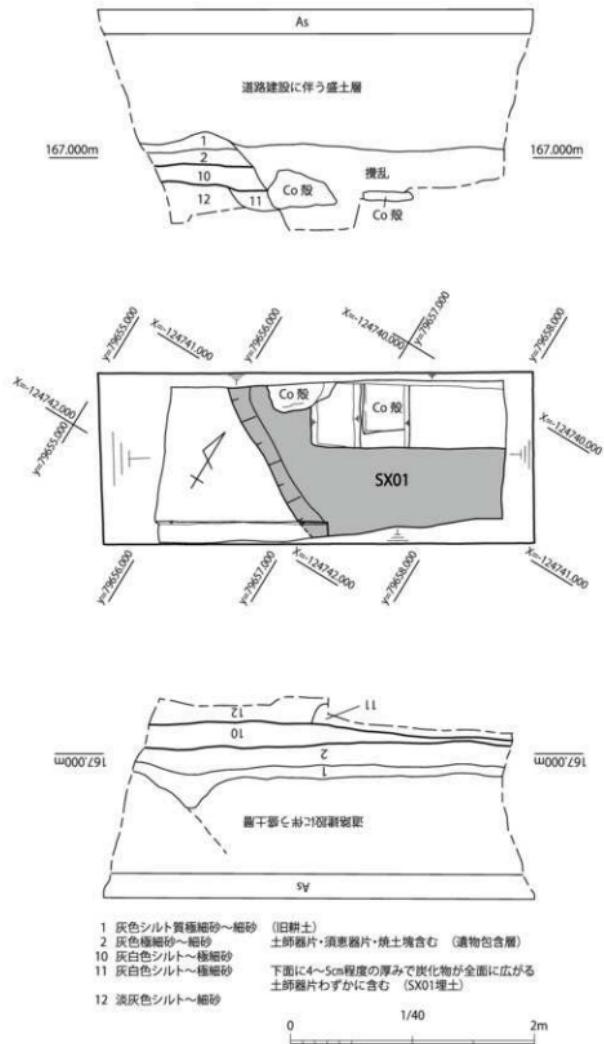




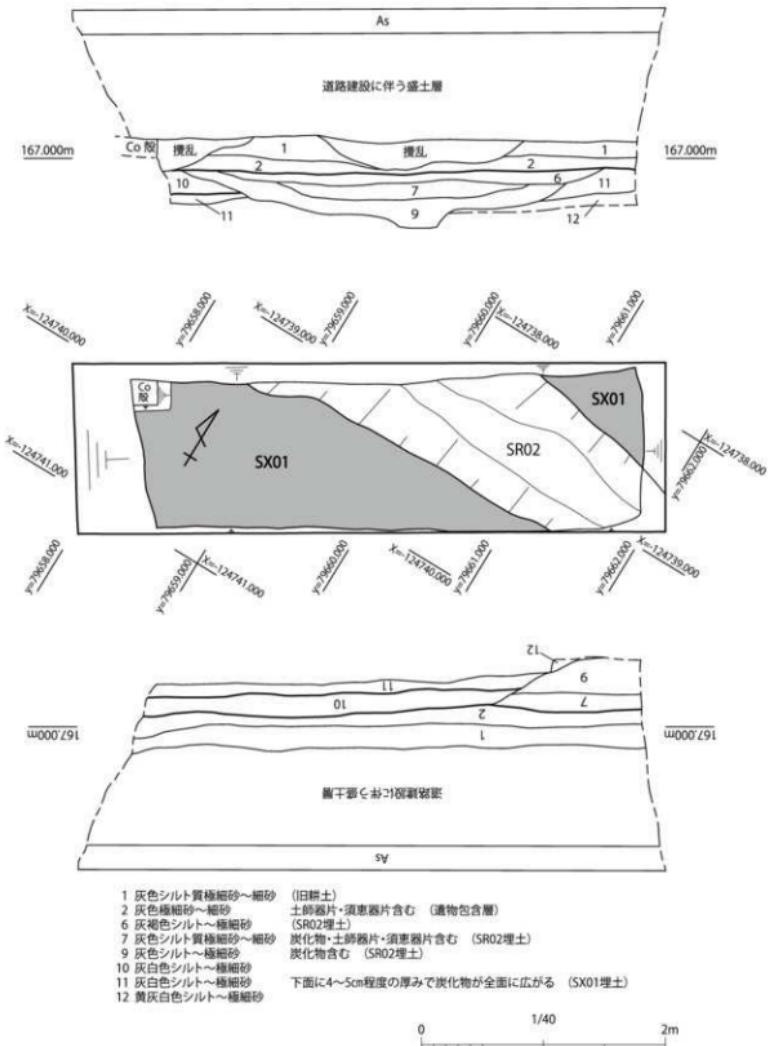
4区平面・断面図・遺構断面図



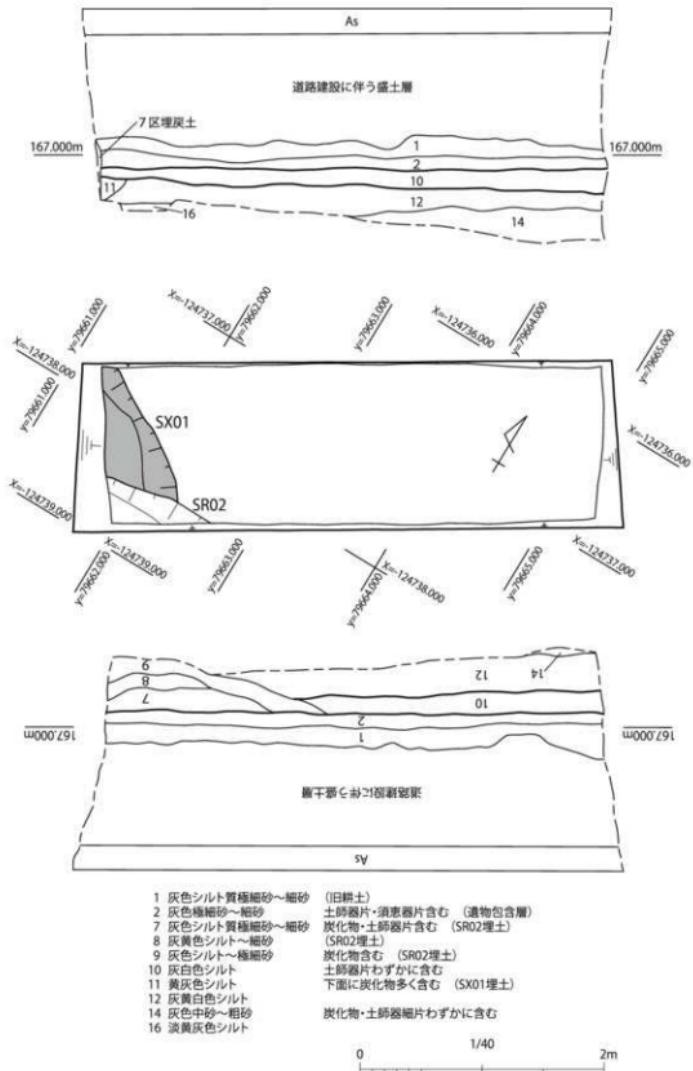
5区平面・断面図



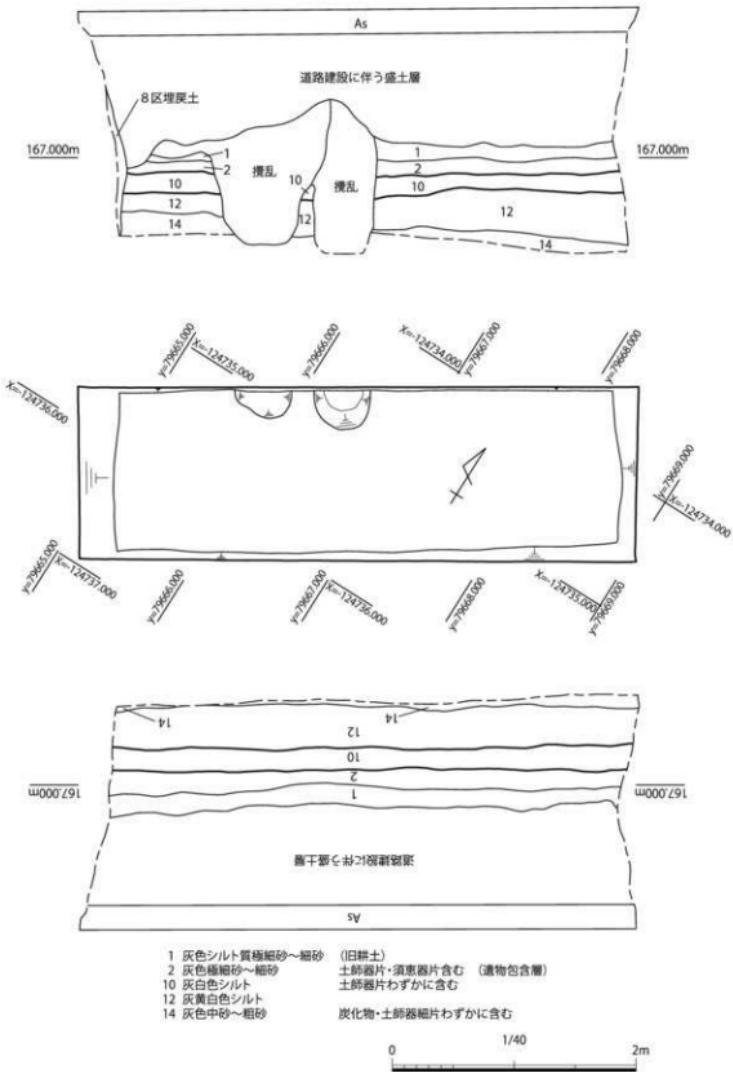
6 区平面・断面図



7区平面・断面図

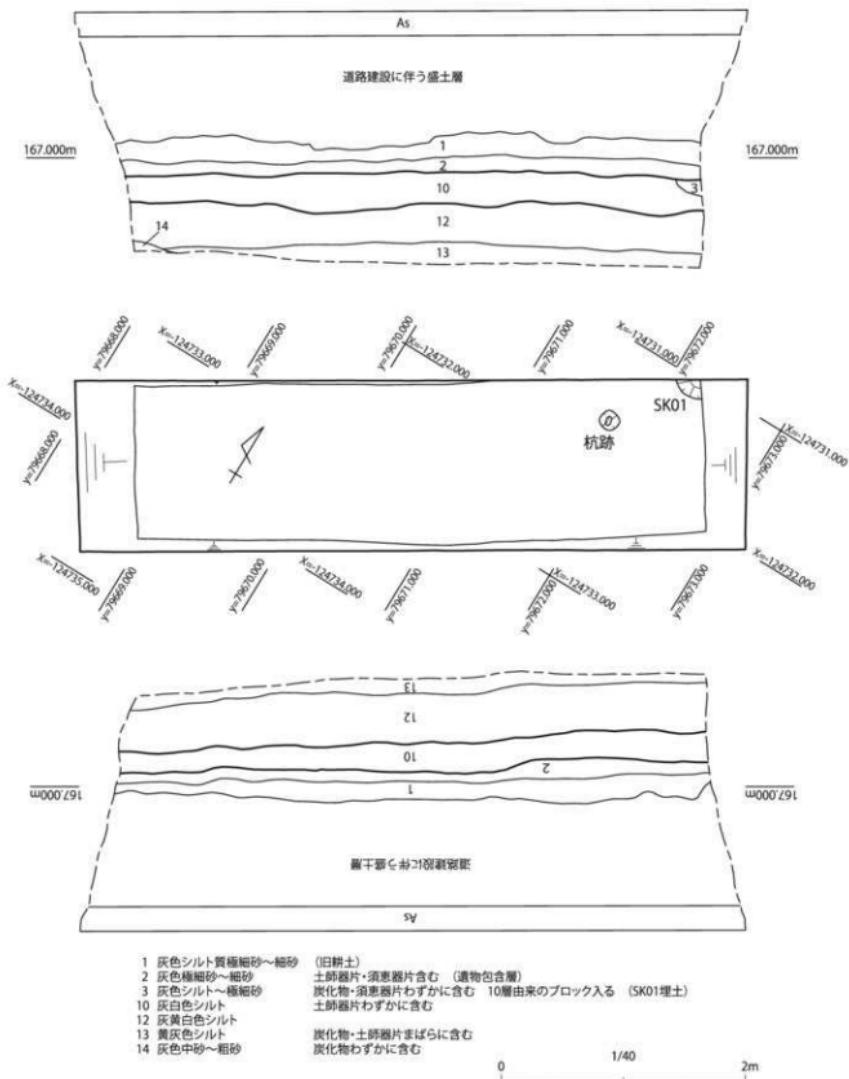


8区平面・断面図

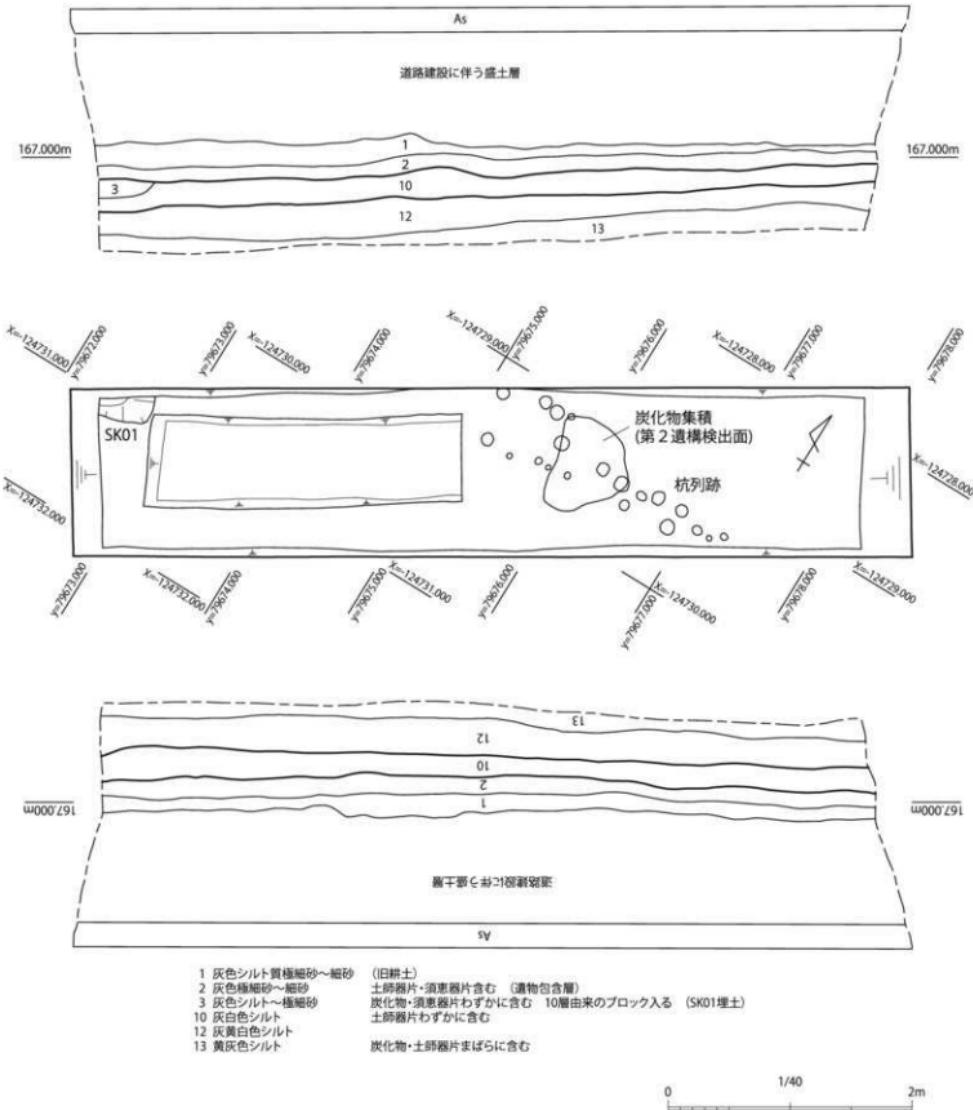


9区平面・断面図

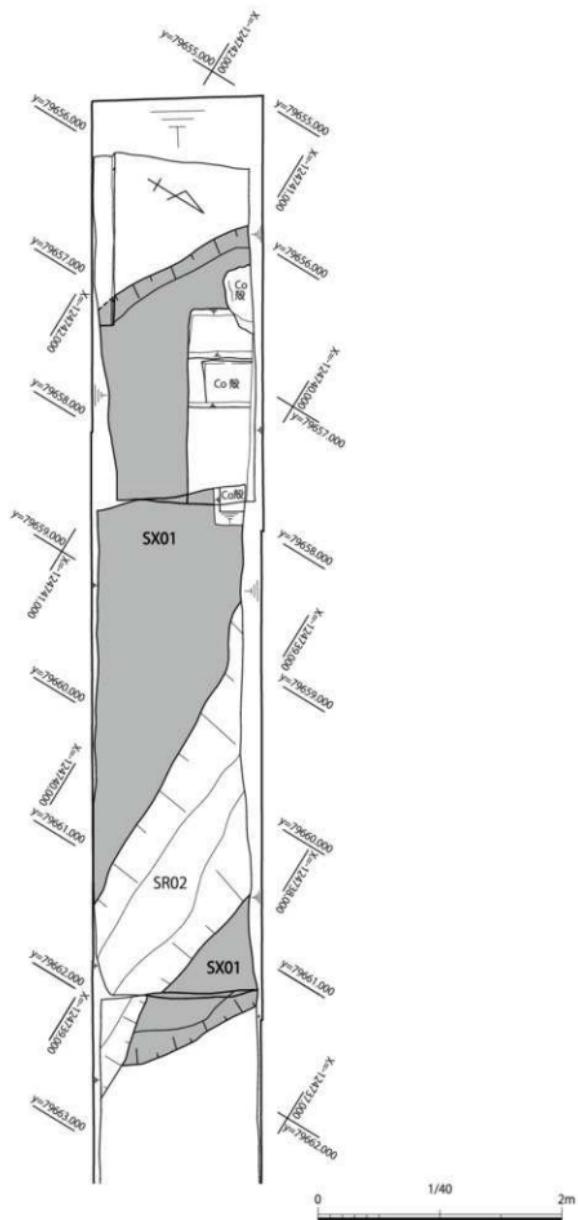
図版 12



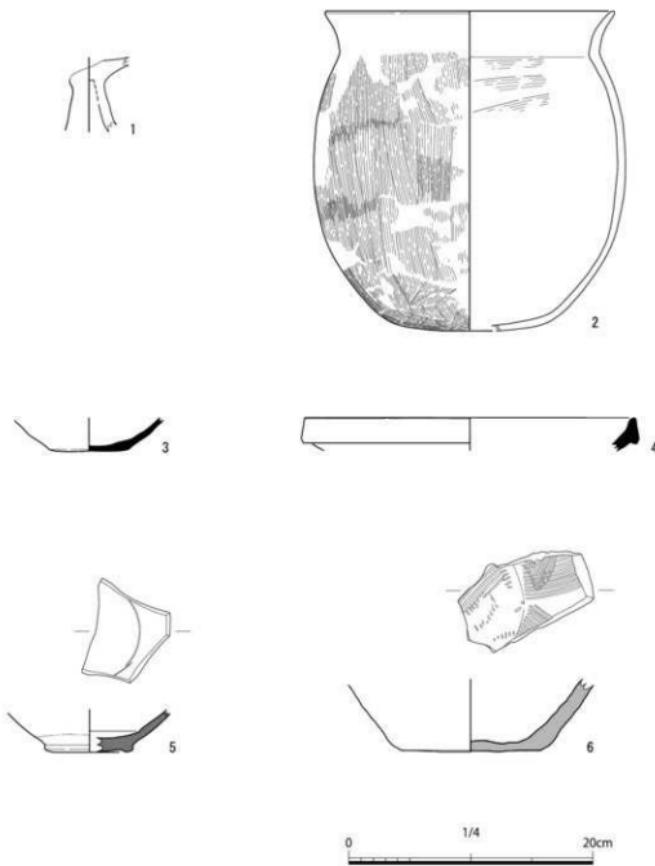
10区平面・断面図



11区平面・断面図



SX01全体平面図（6~8区合成）



出土遺物実測図

写真図版



事業用地近景（南西から）



1区全景（南西から）



1区土層堆積状況（南東から）



1区SP01 完掘状況（北西から）



1区SP02 検出状況（北西から）



1区SP02 完掘状況（北西から）



1区SP03・SP04 検出状況（北東から）



1区SP03 完掘状況（北東から）

写真図版 2



1区 SP04 半截状況（南東から）



1区 SP04 完掘状況（南東から）



2区 全景（南西から）



2区 土層堆積状況（北西から）



2区 SP05 完掘状況（北東から）



2区 SP06 半截状況（南東から）



2区 SP06 完掘状況（南東から）



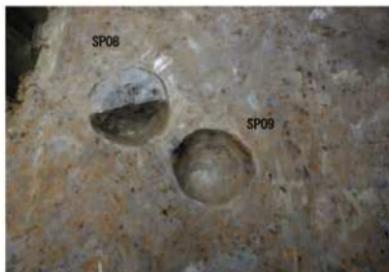
2区 SP07 完掘状況（北東から）



2区 SP08 半裁状況（北東から）



2区 SP08 完掘状況（北東から）



2区 SP09 完掘状況（北東から）



3区 全景（北東から）



3区 土層堆積状況（南東から）



3区 土師器壺(2)検出状況（南東から）



3区 遺物検出状況（南から）

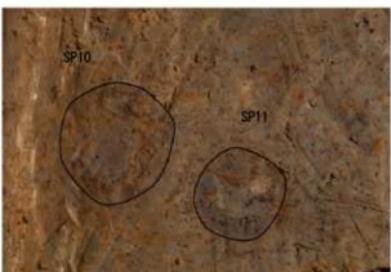


4区 全景（南西から）

写真図版 4



4区土層堆積状況（北西から）



4区SP10・SP11検出状況（北西から）



4区SP10半裁状況（南西から）



4区SP11半裁状況（南西から）



4区SP10・SP11完掘状況（南西から）



4区SP12半裁状況（北東から）



4区SP12完掘状況（南西から）



5区全景（北東から）



5区土層堆積状況（南東から）



6区全景（南西から）



6区土層堆積状況（北西から）



6区SX01検出状況（南西から）



7区第1遺構検出面全景（北東から）



7区第1遺構検出面SR02検出状況（北西から）



7区第2遺構検出面全景（北東から）



7区第2遺構検出面SX01検出状況（北西から）

写真図版 6



7区土層堆積状況（北西から）



8区第1遺構検出面全景（南西から）



8区第1遺構検出面 SR02 検出状況（南西から）



8区第2遺構検出面全景（北東から）



8区第2遺構検出面 SX01 検出状況（北西から）



8区土層堆積状況（南東から）



9区第1遺構検出面全景（南西から）



9区第2遺構検出面全景（南西から）



9区土層堆積状況（北西から）



10区第1遺構検出面全景（南西から）



10区第1遺構検出面 SK01・杭跡検出状況（南東から）



10区SK01 埋土土層断面（南東から）



10区杭跡（南東から）



10区第2遺構検出面全景（南西から）



10区土層堆積状況（南東から）



11区第1遺構検出面全景（北東から）

写真図版 8



11区第1遺構検出面杭列跡検出状況（北東から）



11区第2遺構検出面全景（南西から）



11区土層堆積状況（北西から）



11区第2遺構検出面炭化物集積検出状況(南西から)



機械掘削状況（南西から）



人力掘削状況1（西から）



人力掘削状況2（南西から）



出土遺物（1～9）



出土遺物（土師器、須恵器）

兵庫県文化財調査報告 第 527 冊

神戸市北区

宅原遺跡群

—三田西宮連絡管 送水管布設工事(長尾工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和 5 (2023) 年 3 月 24 日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：松尾印刷株式会社

〒671-0222 兵庫県姫路市別所町小林 494
